

フォーラム・スリーニューズレター

# オープンフォーラム

No.8, Nov.&Dec. 2001

## フォーラム・スリー

〒162-0044新宿区喜久井町20 森川ビル1F

Tel.03-5287-4770 Fax 03-5287-4771

E-mail info@forum3.com

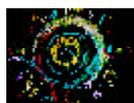
URL http://www.forum3.com/

郵便振替 00160-9-606986 フォーラム・スリー

世界に例のないハイピッチで進む日本の高齢化。そのひずみが、高齢者福祉の現場にも深刻な影響を与えています。今回は、日本の高齢化社会の現場を紹介し、あるべき未来像をかたちづくるための材料を提供しようと思います。

2002年はふたつの講座で幕開けです

## 「BD農業講座」と「オイリュトミー治療芸術講座」



1周年を迎えたフォーラム・スリー最初の特別講座をご案内します。阿蘇の「ぼっこわば農場」からピリオ・ドニーさんと假野祥子さんをお招きしての「農業講座」第2回、ドイツから内山恵さんをお招きしての「オイリュトミー治療芸術講座」第2回「治療オイリュトミー講座」を改題)の2本です。いずれも昨年開催し、ご好評をいただきました。

「農業講座」は、バイオ・ダイナミック(BD)農業の基礎を学ぶとともに、農業に携わる方、農に関心をもつ方々の集いの場となっています。BD農業は、シュタイナーが晩年に行なった農業講座「講演録『農業講座』がイザラ書房より出ています)を出発点として、実践の積み重ねによって発展してきた

農法です。循環系を意識した環境の整備や有機的な土づくりに基礎を置きつつ、農法そのものが、農に携わる人々のモラルや天体まで織り込まれた宇宙観を形成しています。今年のテーマは「農業を豊かにする諸条件」です。

「オイリュトミー治療芸術講座」は、体の動きを通して自分のなかの不調和の調整や自己発見の契機を提供し、講師との対話のなかで日常の問題を取り上げながらそれらを意識化していくワークショップです。「オイリュトミー治療芸術」は、治療オイリュトミーの方法をベースに、グループで動くことの相互作用を加味したオイリュトミーの新たな発展型として注目されています。

いずれも会場はオープンフォーラム早稲田。



### 2002年「農業講座」第2回

2月9日(土): 14:00~16:00/16:30~18:30

2月10日(日): 10:00~12:00/14:00~16:30  
17:00~18:30

### 2002年「オイリュトミー治療芸術講座」第2回

2月22日(金): 14:00~17:30

2月23日(土): 10:00~12:30 14:00~17:30

2月24日(日): 10:00~12:30

オイリュトミー治療芸術講座はコマ単位で参加OK。

お申込はフォーラム・スリーへ

## フィリピンの社会派アントロポソフィスト

## ニコノア・パーラスさんが来日します



### ニコノア・パーラス氏 ひびきの村主催講座

2002年1月22~26日, 10:30~12:30

講座「市民運動としての社会三層構造」

2002年1月22~26日, 19:00~21:00

講座「共同体で共に生きること(非公開)」

いずれも会場は: 北海道伊達市「ひびきの村」

2002年1月27日, 10:00~12:00

札幌講演「社会を変える市民運動」

会場: 札幌市女性センター2階研修室

問い合わせ・申し込み先

「ひびきの村」事務局

〒052-0021北海道伊達市末永町47須藤ビル3F

Tel.&Fax 0142-21-2684(平日9:00~18:00)

hibiki@phoenix-c.or.jp

### やまさと保育園主催講座

2002年1月27日, 19:00~(予定)

講座「未来共同体設立へ」

会場: 名古屋市中区・やまさと保育園

Tel.052-833-7318(中村/右田) Fax 052-834-8764

ニコノア・パーラスさん(過去のニューズレターではニカノー・ペルラスと表記)が再来日します。経済グローバリゼーションによる世界危機の可能性について、早くから国際会議を開くなどして、人智学<sup>アントロポソフィー</sup>の立場から警鐘を鳴らしてきたアントロポソフィストです。

世界を震撼させたアメリカ同時多発テロの下地をつくったのは、WTOや世界銀行、国際通貨基金(IMF)などによって主導されている経済グローバリゼーションであることは、いまマスコミが盛んに報じています。

2年前にはまったく違った状況がありました。1999年12月、「シアトルの珍事」として知られる事件が起きました。WTO(世界貿易機構)シアトル会議に10万人もの市民グループが集結し、会場を取り巻き、会議を決裂に迫

り込んだのです。「環境問題ならともかく、なぜWTOがやり玉に?」と、当時のマスコミは首をひねりました。ニコノアさんは、これら市民グループの動きを、グローバリゼーションに均衡をもたらすものとして、また有機的な社会実現のための力強い衝動として高く評価していました。

今回の来日は北海道伊達市の人智学共同体ひびきの村の招待によるもので、アントロポソフィーの社会論「社会三層構造(社会有機体三分節化)」の講座を行なうためです。

講座内容は、「市民運動としての社会三層構造」、「共同体で共に生きること」、「社会を変える市民運動」の3テーマです。ニコノアさんの講座は「未来共同体設立へ」をテーマに、名古屋でも開催予定です。



特集1：日本の老後を考える(1)  
ほんとうの“お家”を探して  
あるデイサービスの日



特別養護老人ホーム「モモ」でのコンサート(4面)



高<sup>ゆううつ</sup>齢化時代到来 人間不在の憂鬱

私には当年90歳の母がいる。母はいま入院中だが、毎日見舞いから帰るたびに私の心は重くなる。母の入院先は老人医療専門の病院で、手のかかる痴呆のお年寄りが多いため、看護・介護の人手が足りず、病室にはピリピリとした空気が張りつめている。お年寄りは自分の要求を伝えることが苦手な上に、要求されなければ病院の職員は何も手を出さ(せ)ないから、お年寄りは見捨てられたような虚ろな表情をしている。これは介護保険導入後のさまざまなサービスにおいても同様だ。年寄りを集団として扱いやすいようにプログラムされた現場を見るにつけ、“なにか違う”という思いが強くなる。介護する側だって、現状のシステムのなかでひとりの力ではどうにもならないという不満があるに違いない。

ゆったりとした人間的な環境のある部屋、ゆとりのある介護、お年寄りを子ども扱いしないレクリエーション活動、そんな高齢者福祉の実現を願い、今回の特集を企画した。ひとりひとりのこうした思いを伝えるために、いまの私たちに何ができるのか、ぜひ皆さんの声をお聞かせ下さい。

(しまだれいこ/オープンフォーラム編集部)



岡山の特別老人ホーム上道荘でオリエントミミをしている皆さん(8面)

オープンフォーラムの記事に対する読者の皆さんのリアクションをお寄せください。過去の記事についてのご感想もOK。待ってます！(編集部)

## あるデイサービスの日

嵯峨昌紀子

さすらいの看護婦。病棟(内科、外科、産科)訪問看護、乳児施設、医務室、障害児教育などを経験。

縁あって、4月から高齢者の福祉事業に従事するようになりました。東京都内にある平均的なデイサービスです。私の担当は痴呆のあるお年寄り、定員は1日10人です。職員は6人ですが、週6日のサービスを1日4人でローテーションを組んで仕事をしています。介護保険の導入前に比べると、職員は1.5人ほど減ったそうです。

デイサービスの時間帯は朝10時から午後3時までですが、ドア・ツー・ドアのサービスである上、痴呆の方や車椅子の方が多いため、送迎に前後1時間は費やします。1日の流れは、午前のレクリエーションプログラムに40分、昼食後は入浴する人とプログラムに参加する人、お昼寝をする人に分かれます。まあ、保育園のお年寄り版みたいなものです。

痴呆の方の場合、徘徊のある人、動きたくない人、拒否のある人など様々ですが、昼食が終わるとやおら帰りのことが気になり出します。数分おきに、「もう帰らなくちゃ、何時かしら」と言いだしたり、お金を出して数え始めたり、座ってられず立ち歩きが始まります。ひとりが立つとほかのお年寄りたちもそわそわし始め、「どこに行くのかしら」「トイレに行きたいわ」と、蜂の巣をつついたような騒ぎです。食事の時間は職員が人々に対応するのですが、その日落ち着かない人がいると、いつ「学級崩壊」が始まるかと私たちはびくびくしてしまいます。食事の介助に手を動かしながら、なんとか立ち歩きを沈めようと職員たちの必死の声がけ

## 日本の老後、わたしはこう考える(1)

大住祐子(保健婦)

ドイツの看護研究所に学び、企業の健康管理、人智学の健康講座などをこなしている。著書に『シュタイナーに看護を学ぶ』(春秋社)

昨年、厚生省は21世紀の国民健康づくり運動として「健康日本21」をスタートさせた。それに沿った計画が各都道府県で立てられ、数値的な目標に向けての取り組みが始まっている。この内容を一口で言うと、病気になるように、寝たきりや呆けにならないように、生活習慣を見直して良い習慣をつけさせようというものである。

確かに、ある程度年齢が高くなっても運動によって筋力を増すこともできるだろう。しかし誰もがそうできるわけでもなく、時には無理な運動でかえってからだの具合を悪くしてしまうこともある。国を挙げて「みんな健康になろう」と「健康こそがもっとも大事だ」とでもいうような施策は必要なのだろうか。病いや老いの本質とはどのような



写真はぬらし絵を楽しむ特別養護老人ホーム「モモの皆さん(6面)

が続きます。こんなときは、付き添いのボランティアがいてくれたら、思う存分歩いてもらえるのに、と思います。

入浴サービスも大きな仕事で、家庭で入浴できない方が巡回入浴や施設入浴を利用されます。驚いたのは、私が以前働いていた病院では考えられないような身体の状態の悪い人でも、施設入浴することです。介護保険導入後、すべてのサービスが点数で計算されるようになり、点数を稼がなければ経営が苦しい状況です。もう死を迎える準備に入っているような方でも、家族の希望があれば送迎つきの入浴を受け入れなければなりません。入浴中、いつ呼吸が止まるかとハラハラすることもあります。

一方、職員の方も、「お風呂に入れてあげたい」の一心で、ちょっと頑なになっている気もします。こんなとき、いったい誰のためのサービスなのかと思うときがあります。必ず入浴せずとも、まめに清拭(せいしつ)していれば、身体の清潔は保てるし、大事な皮脂をとりすぎず、皮膚にはかえってよいのではと思います。施設入浴者は、週1回のその入浴だけに頼っているケースが多いようで、祭日で休みになった翌週はひどい状態です。

トイレ介助にもさまざまなドラマがあります。お食事の方もいらっしゃると思いますので、詳しいことは控えさせていただきますが、ご家庭でもたいへんなドラマが繰り返されていると推察します。

## ほんとうの「お家」を探して

老人施設に勤めて感じる違和感は、それは日常

とかげはなれた空間ということでしょうか。バスに乗って一ヶ所に集められ、いやいやでも皆で体操、ゲームなど参加させられ、保育園や学校での教育の延長にあるのかしら、もっと個人を尊重した接し方はないものかと考えます。

私の職場は比較的恵まれている方だと思いますが、看護婦という立場上さまざまなサービスの現場を見る機会があり、問題を抱える現場の多さに嘆息することもあります。

- 1.職員不足(介護保険になり、約2割減)レクリエーションプログラムを依頼していたプロの方に頼めず、すべてを職員がすることに。
- 2.職員が精神的に育っていない。現代社会一般の傾向としてあることだが、大人になりきれず、仕事に対して責任をとろうとしない人が多い。結果的に仕事を預け合っしまい、抜け落ちてしまうこともあります。人を信頼することが下手で、職員と職員、職員とお年寄りの信頼を育てるのが難しい。もっとも人間的であるべき場でありながら、あるのび仕事のみ、あるいはシステムのみになってしまいがち。自分の理想と現実の違いに疲れ、燃え尽き症候群になっている人も多い。
- 3.技術的にも育っていない人が多い。養成が即席で、未経験に等しい状態でやってくるため、「体で覚える」の丁寧奉公の世界。そのため、どのようにしたらよりよくなるかを自分自身で考えようとせず、結果的に技術的な未熟さにつながっているように思う。
- 4.施設の構造が仕事の現実とかげ離れている。まず容れ物をつくってから、中味を入れると

いうやり方の弊害がひどい。

5.いやいや来ているお年寄りもいるので、プログラムを楽しめない。また、家で休んでいた方がよいと思うような健康状態でも、家族のために来ている方がいる。

問題は多々ありますが、そのなかで私たちにできることは何でしょうか?利用者のためにと、本当に一所懸命仕事をしている職員は多いのですが、滅私奉公的になってしまうところがなきにしもあらずです。それがほんとうに利用者のためなのか、自分の理想を満たすためなのか、もう一度考えてみる必要があります。利用者のため、利用者のためと、一面的に思い詰めてしまうと、そこからは逆に人間的な関係が損なわれてしまうように思います。仕事とはいえ、お互い人間どうしの関係なので、自分と相手の相互関係で考えていくと、「システム」ではなく、「和あるいば環」が生まれてくるのではないかと思います。

ある痴呆のお年寄りに、来所されると落ち着かず、「家に帰りたい」と繰り返す方がいました。じつは、その方はお家で「家に帰りたい」と言い続けているのだそうです。その方にとっての本当の「お家」は、いったいどこにあるのでしょうか。

PS最近、レクリエーションを成功させる秘訣を発見しました。痴呆のお年寄りは子どもと同じで、とても単純。どんなプログラムでも、職員が真剣になって一緒に遊べば必ず成功します。(さがまきこ)

ことだろうか。

人間は年を重ね、さまざまな経験を積むことで精神的に成長していく。現在の日本のように「若々しさ」だけに価値を見出すような社会では、このような「老成」こそが老いの本質であることが見落とされてしまう。先述の施策によって身体機能の衰えが一種の悪者のように捉えられてしまう風潮が強まれば、私たちが老いを正しく迎えることがますます難しくなるだろう。

老いと常に隣り合わせである病いの現場においてもそれは同じだ。歳をとれば誰でも気弱になるし、依存心も強くなる。時間もあまりあまっているから、少しの不調でも病院のお世話になる。その病院では、検査数値が正常から少しでも外れていると薬を出すような医療がまかり通っている。検査や薬にしか点数がつかない医療保険制度がその元凶だ。医師の説明やアドバイスは保険医療の埒外なのである。患者は患者ですぐに結果をほしがり、受診しても不安が解消されないから、医者(いしや)を梯子(はしご)して検査を繰り返し、また薬をもらう。

入院すればすぐに点滴が始まる。患者はベッドに横たわり、食事が

取れるにもかかわらず切れ間なく点滴を受け、耳にはテレビのイヤホンがさしっぱなしにされている。相部屋のベッドは薄いカーテンで仕切られているのみ。家族が見舞い(みまひ)にきても居場所がなく、話し声は筒抜けになってしまう。家庭に帰ればそれぞれの部屋があるというのに、病気になるにつらい時にこのような環境で我慢しなければならないとはどういうことだろうか。自分の病気を考えたり、人生を考えたりすることがこのような環境でできるのだろうか。

現在の病院をみると、病気は医療者が治すものだといまだに信じられているようである。しかし病気は本来、患者自身がそれにかかわらなければならないものである。からだの不自由さや痛みなど、ある程度はそれを受け入れていくことも必要である。

老いを否定してしまう社会ではなく、どのような状態でも社会の一員として生活できるようになることが大事なのではないだろうか。お花見や紅葉狩りにいったり、コンサートやお芝居を楽しんだりというようなことが私たちの心には必要であり、それが可能となるような社会の整備こそが国の施策として必要なのではないのだろうか。



特集1：日本の老後を考える(2)  
**特別養護老人ホーム“モモ”**  
 オープンフォーラム編集部



特別養護老人ホーム“モモ”を訪ねました  
 取材と文：佐藤雅史

「とてもいい雰囲気の老人ホームがあるよ」  
 そう言われて社会福祉法人・蒼生会が運営する特別養護老人ホーム“モモ”にうかがった。モモは東京と神奈川の境にあるベッドタウン町田市の中心部からバスで10分ほどの住宅街にある。特養定員80名 ショートステイ定員20名というの、モモのある相模原地域では平均的な規模だが、落ち着いたダークイエローに仕上げられた階段の建物の前に立つと、その敷地の広さに圧倒される。

入り口を入ると、すぐ左手の奥に広々としたホールが見え、とても開放的な雰囲気だ。玄関には敷居がまったくなく、小さな段差すら取り払われている。このような施設では当たり前なのかもしれないが、最近のバリアフリー・マンションの水準から見ても徹底していると思った。左脇に目を移すと、淡い透明感のある色彩で描かれた水彩画が壁にかけられている。足下のマットにはかわいらしいカメのマークが描かれている。“モモ”の名をもらったミヒヤエル・エンデの物語に登場するカシオペアだ。

副所長の久保真由美さんが出迎えてくださった。モモの設立から運営まで、中心的に担ってきたスタッフのおひとりだ。久保さんの案内で、所内を見学させていただいた。まず、そのゆったりとしたスペースに驚く。近代的なバリアフリー設備を備えた高齢者福祉施設の数が増えてきているが、効率優先でどこかせこましい印象を受けるところが多い。しかし、植え込みのある中庭に向けてガラス張りとなったモモの回廊は、とても開放的で豊かになれる気がする。久保さんは出会うお年寄りひとりひとりに声をかけながら、部屋を案内してくださった。モモは4人部屋が中心の設計だが、ベッドはパーティションで仕切れ、プライバシーへの配慮もよくなされていると感じた。

所内を一通り見学した後、水彩のクラスにも使われている集会所でお話をうかがった。

「今日は、日本の高齢化社会と人智学アントロポソフィアの接点についてお聞きしたくてうかがいました」と切り出すと、久保さん「モモでは特別に人智学的な実践を行なっているところは何かありませんか。水彩のクラスがあるくらいです。強いて言うなら、人智学は私にとっての精神的な支えです」と、笑いながらおっしゃった。

### 日本の社会に根ざす活動を

久保さんは、子育てを通して人智学に出会い、モモの創設にあたっては、ドイツなど海外の人智学施設も視察してまわられた。「海外の高齢者福祉から学ぶものは？」とうかがった。

「ヨーロッパと日本では、まったく異なる取り組みが必要ですよ」と久保さん。まず、お年寄りが違う。ヨーロッパのお年寄りは、自分の考えにしっかりした主張をもっている。所内での生活にも自分で責任をもとうとするし、福祉政

策に対してもしっかりと意識をもつ人が多い。個が確立されたヨーロッパに比べると、日本のお年寄りは、受け身で、依存する気持ちに支配されやすい。善し悪しの問題ではなく、これを事実として認め、その現実に応じた介護をつくっていくことが大切だということ。なるほど。

同じことが福祉に携わる側にもいえる。「福祉の仕事は厳しい仕事です。お年寄りへの愛情とともに、仕事に対する厳しさと責任感を併せもつ自立心がなければ、とても続けることはできません」日本人のメンタリティーを考えると、所長を置かず、職員がまったく対等な立場で施設を運営していくやり方は考えられないという。

日本社会の福祉事業に対する理解の低さも大きな問題となっている。モモ建設にあたって、当初は地域からの反発があった。その多くは、“ひっそりと山のなかに建てられるもの”といった、老人ホームの誤ったイメージから来ているものだった。しかし、結局それを解消させたのも、高齢化の現実だった。反対する立場の方々にとっても、高齢化はそれだけ切実な問題となっていたのだ。モモのような活動は、“恥ずべきもの”として地域のなかに隠されているものを、“当たり前なもの”として白日の下にさらけ出す契機をつくる役割も担っているらしい。

### ユーモアがモモの宝です

このようなさまざまな問題点に、モモはどのように取り組んでいるのだろうか。久保さんに嵯峨さんの記事(2面)を読んでいただいた。



モモを支えるもの

「老人性痴呆症は働きかけで必ず戻る」とおっしゃる久保さんの言葉には、20代後半に取り組んだ母親の介護経験が生きています。事故で植物状態になった母親を病院から引き取り、わずかに残った嚙み下力 飲み下す力を頼りに、半年で快癒させた経験です。

病院でお母さんの様子を見ていた久保さんには、たとえ無意識であっても、周囲の働きかけはその人の深いところに届いているという確信がありました。この経験がモモでの実践の深

い部分に活かされているのでしょう。

久保さんのお話をうかがっていると、そこには「自分になが引き受けられるのか」という問いが常に響いているように思います。

さまざまな問題への取り組みにおいて、久保さんのスタンスは、常に自分自身に向かっています。「他者にながかを求めるのは間違っていると思います。福祉の現場には、行政や法制度に責任を転嫁できない苦しさがあります。困っている人は現にここにいる。結局、その現実に対して自分が何をすべきなのかを、自分自身を含めた足元から見据えることしかないと思っています」。「自分のなかに中心をもつこと、わたしがわたしによって立つこと。人智学が私にとって大切なのは、このことの学びの道がそこに示されているからです。」 (編集部)

モモの3年にわたる実直な積み重ねは、地域の確かな信頼を生み出しました。「目の前のことを誠実に。その一步一步の積み重ねしかありません。それからコミュニケーションですね。」「いまの現実に対して文句を言うだけでは何も踏み出せない。問題点を客観的に提供していかなければ。難しいことですけどね。」



モモは、寝たきりのお年寄り対応の施設で重度痴呆対応型には整備されていませんが、痴呆症の方は大きなパーセンテージを占めています。モモでは、徘徊型の方でも所内の生活を楽しく下さる方が多いと思います。なぜか分かりませんが、気に入っていただいているらしく、休みの日にもひとり歩いて来て下さって困ったりするケースが何度もあります。デイサービス提供日以外の催しでも、今年のクリスマス・パーティー参加者の数が60名以上と去年を大幅に上回り、嬉しい悲鳴をあげています。「このリハビリには愛情がある。もっと自信を持ちなさい」と、専門の老健施設でのリハビリを経験された方から激励されたこともありました。

モモの自慢は事務所が開放的であること、ユーモアのセンスがあること。これがモモの明るさを作っていると思います。よく事務所で話題に上るのは、最初暗い顔つきだったご家族とご利用者の表情がだんだん明るくなっていくことです。ちょっとした事務所での立ち話しがすごい効果を生んでいるのだと思います。

福祉に関わっている皆さんは、正義感が強く、生真面目な方が多いので、ユーモアで乗り切ることが大切だと思います。人智学を勉強する皆さんもそうですよね笑。息を吸ってばかりでは病気になるます。

職員構成もサービスに支障がある場合は補充をしていますし、毎日、25名の定員に職員が9名、ボランティアさん1名、研修生がいたり、重度痴呆症の施設より充実しているかも分かりません。午前中は職員を含めた歓談と入浴と体

操、午後はレクレーションとリハビリが行われます。三時のおやつに、小中学生との交流やボランティアさんによる楽器演奏や民謡等が入り、午後4時の終了となります。

土曜、日曜、祭日はお休みを頂いています。職員にも休みは必要ですから。利用者からは当然休日サービスの希望もあるのですが、現在はこの体制を崩す予定はなく、どうしてもおっしゃる方には、他の施設を紹介しています。

### 人材育成は共通の難問です

職員の精神的な未熟さの問題は、どの施設でも共通するものがあります。「ここは学校じゃない」と言いたくなるケースは多々あるのです。仕事において対等な土俵に立って話し合えるような人材の育成は緊急の課題です。その責任の重さと難しさを痛感しています。

職員も人間ですし、正義感の強い人が多いですから、利用者のわがままに我慢できないというケースもあります。そこを感情を抜きにしてどう対応していくかなのですが、そのプロが育ちにくいのです。人間の感情とは本当に厄介です。本人たちは真剣ですが、客観的に見るとなぜこうなるの?と思うケースが多いのです。

モモではどんな些細なこともケース記録として残したり、事故報告書をつくります。監査機関からばこんな小さなことまで?と言われる。これだけやっけても、全員で共有できているものがどれだけあるのか、意識の根底に働きかける作業がいちばん難しいところです。

### 光を見つめ続けて

それでも大久保さんは、それらの問題の向こうに輝いている光を感じることがあるという。

いまの若者はどこか受け身で、ナイーブな心性をもっている。大久保さんはそこに、自分たちの世代とは違う新しい能力が隠されていると感じている。周囲に対して敏感で、物事を内面的に感じる力に長けている。他者が何を考え、感じているかを鋭く察知する。残念なのは、彼らのなかでその力がネガティブに働いて、守りに徹してしまうことだ。「いまの若い人たちは、周囲の大人に認められる経験をあまりしていない。私たちが彼らの価値をどんどん認めてやり、引きこもった力をこちら側に引き出してあげることで、驚くほどの成長をみせることがたくさんありますね。」

開所当初に入所し、106歳で亡くなったクリスマスちゃんのご婦人がいた。彼女から流れ出る信仰の光に、大久保さんやスタッフはいつも暖められる思いだった。ある日、そのご婦人が、介護士スタッフの働きぶりを眺めながら大久保さんに向かって言った。「私はあの子を一人前にするまでは、あちらの世界に行けないわ。」大久保さんはその言葉に、一瞬、時が止まったように感じたという。

ホームには、関わる人の数だけの人生があり、家族模様がある。笑いがあり、喧嘩があり、涙も流す。その生きた現実のなかに、大久保さんは暖かな光を見つめている。

## 日本の老後、わたしはこう考える(2)

斉藤千枝子(指圧師)

おもに脳梗塞、脳性マヒなどの出張指圧を行なって15年を迎える

周りにいるお年寄りを見ていると、人の世話は得意だけれど、世話になるのは苦手という人が多いです。本音をなかなか言えなくて、気を遣ってばかりいる人もいます。思っていることとは、全然違うことを言ったりして、誤解されることもあります。

コンピューターを使って、まばたきだけでも意思表示ができる時代です。たとえ重い障害があっても自分の意思を伝えることは可能になりましたが、今どうしてももらいたいのかをはっきり人に伝えるのは、案外むずかしいみたいです。

一所懸命、人のため、家族のために尽くしてきた人にも、思うように動けなくなる時が来ます。ところが、自分を後まわしにして、人のことばかりしていたので、自分と向き合うのには慣れていないんです

ね。はっきりものが言えないというのは本人にとっても、周りの人たちにとっても、大変なことだと思います。

老後に備えて、身体を鍛えている人はたくさんいます。プールへ行って、山に行っても、さかんにトレーニングに励んでいる中高年に出会います。かくいう私も、そのひとりなのですが、でも、からだは年とともに衰えていくのが自然なのではないかという気がしています。指圧師の私がこんなことを言うのはおかしいですが、若返りや健康にあまりに執着すると、いざ病気になった時に、そのことを受け入れにくくなるのかもしれない。

足腰を鍛えるというより、むしろ、「本当は何をしたいのか?」を自分に聞いてみて、それを人に伝える練習のようなものが必要なのではないでしょうか。自分の身の回りのことが出来なくなってきた時には、この作業の連続が待っています。「こうしてほしい」「こうしてほしい」をはっきり言うのは勇気がいります。好き嫌いではなく、もっと深いところにある欲求は一体なんなのかを、ちょっと立ち止まって、考えてみようと思っているこの頃です。



## 特集1：日本の老後を考える(3) お年寄りと水彩を描く

吉澤明子(芸術療法士/画家)

前ページでご紹介した老人ホーム「モモ」では、毎月2回、水彩のクラスが開かれています。「モモ」の廊下には皆さんが描かれた作品が飾られ、柔らかな色を投げかけています。お年寄りとともに水彩を描く楽しみや発見を、クラスを指導されている吉澤さんに書いていただきました。



吉澤明子さん：1987～1992年、ドイツでシュタイナーの芸術療法を学ぶ。LDおよび学校不適応児の学園「橋の木学園」に7年間つとめ、現在は同校アドバイザー。ハンディをもつ子どもの個別指導も行っている。近年は後進の指導に力を注ぐ。主宰絵画クラス多数。訳書に『芸術治療の実際』(耕文舎刊/ノイザラ書房扱)ほか。共著として『子どものいのちを育むシュタイナー教育入門』(学習研究社)、『巣立ちへの伴走 橋の木学園実践記録』(社会理論社)。

特別養護老人ホーム「モモ」開設から8ヶ月後の1999年6月から、私は月2回木曜日の午後、お年寄りたちと絵を描く事となった。かれこれ2年半になる。ドイツの病院で実習中に数人のお年寄りに接したことはあるが、お年寄りのグループというのは私にとっては初めての経験だった。

副施設長の久保真由美さんが熱心に薦めてくれたこともあって、最初から10人ほどの方々が集まった。それから2年半あまり、ずっと続けている方もあるし、途中でやめた方、身体の具合が悪くなってこられなくなった方もおられるが、新たに入った方もあり、現在も10人程の出席者である。約半数が車椅子をお使いで、それぞれなんらかの病をかかえている。癌、リュウマチ、糖尿病、痴呆等々。

ほとんどの方ははじめにおっしゃる。「絵を見るのは好きだけど、描くのはへたなので、こうした苦手意識は、お年寄りに限らず、日本人には強いように思う。「へたで一向にかまわないんですよ。難しいことは何にもないんです。まずは一語に描いてみてください」。私が誘うと、皆さんは見よう見まねで筆を動かしてはじめた。

1年目は、その時期その時期の季節の色を味わった。2年目に入ると、季節の色から発展させて、その時期の花々、魚や鳥も描いた。透明水彩の2色が出会い、あるいは混じりあい新しい色が生まれる。「きれいね」。お隣の人の画面をのぞいて、「まあ、あなたのいい色ね」と、感嘆の声をあげる。感情が

いきいきとはずむ。

アジサイなど、具体的な花を描くようになってからは、「あの花どんなだったかしら」「なんだか解らなくなっちゃった」「むつかしい」と言いながらも、私が黒板に描いていく手本を一生懸命見ながら筆をうごかす。

「とてもよいですよ」と私が言っても半信半疑といった面もちで、ほとんどの方が首をかしげる。それでも描き終わって皆の絵をならべると、「皆さんの良くできているね」本当に感じがでている」とほめあう。

そのうち、散歩の折りなどに、「いまは桜が盛りだから、次はきっと描くと思うよ」と、いろいろな花を観察してくるようになった。「昨夜の月はきれいだったよ」と、ベランダでずっと月を見ていたことを報告してくれる。

今年9月、ホームの文化祭「カシオペア祭」が開かれた。そのとき展示した水彩画は今もホームの廊下の壁を飾っている。この水彩画特有の透明感、明るさ、穏やかさが、落ち着いた居心地よい空間をつくりだしている。この廊下をぐるっと回ると、先日106歳で亡くなった方の一生の写真展示がある。

丸鬘に着物時代から昭和初期のモガのハイカラな姿、そして暗い戦争時代を過ぎ、戦後の物のない時代、高度成長期そしてバブル期を経て平坦とは言えない人生。ああ今のお年寄りはこういう時代を生きてきたの



だ、人生とはなんと多彩なものかと改めて思う。そして、この人生の最終章に水彩を描く。それらは遠い記憶につながる。

いつかみた青い空、あの雲、夕焼け、朝日の輝き、樹葉の移ろい、梢をわたる風、その香り。そして、もっともっと遠い記憶、私を今ここにあらしめている働きにまで届く記憶。美しい自然の内奥にある、あの絶対的なものに向かう記憶をたぐり寄せる行為。光と闇が織りなす色彩によって魂を世界の造形力へと向かわせる。

昼から夜へ、夜の闇から朝のまばゆい光へ、緑の繁茂する彩り豊かな夏から、自然が最後の炎を燃え上がらせつつも衰えていく秋、自身のうちに引きこもりじっと耐える冬、そして新たに再びやってくる喜びの春へと、自然事象のうちに息づく宇宙的リズムをも意識を越えてとらえるなら、その芸術行為は、未来への視野をも取り込む豊かな行為になるでしょう。



飾られた作品がモモの廊下に柔らかな色彩を投げかけます、

### 水彩でみずみずしく！

“働くことだけが生き甲斐”という時代を経てきた日本のお年寄りにとって、仕事を失った後の精神的空白をどのように埋めていくかということは切実な問題です。モモの水彩クラスは、そうしたお年寄りの大切な楽しみのひとつとなっています。ぬらした紙の上に水に溶いた透明水彩の具を平筆で広げ、紙の上で色を出させていく“ぬらし絵”の技法はしかし、たんなる楽しみにとどまらない力をその内に秘めて

います。

白い紙の上でダイナミックに変化していく色の生き生きとした体験、その透きとおった非物質的な色あい、そこから生み出される様々なイメージ、そしてたっぷりの水を使うこと。それらがあわさって、お年寄りにうるおいをもたらす、リラックスさせ、呼吸を楽にさせるような、穏やかな解放感が生み出されます。魂が枯渇させられてしまうような現代にあっては、こうしたみずみずしい治療作用がいっそう求められていくのではないのでしょうか(編集部)



特集1：日本の老後を考える(4)

## 死ぬことと生きること

小林直生(キリスト者共同体司祭)

老いを考えることは、死を見つめることでもありません。キリスト者共同体司祭の小林直生さんによる、人智学の立場から死を考えるための良書が出版されましたので、ご紹介します。

古来あらゆる宗教は深く老・病・死にかかわってきました。「宗教改新運動」としてのキリスト者共同体でも、この老・病・死にどう向き合うのか、という問いに答えるべく1922年の創設以来さまざまな試みをしてきています。

現在、ドイツ国内にはいくつかのケアハウスを併設した老人ホームや重度の介護を必要とする老人の為に施設を運営しております。施設内では毎週講演会やコンサート等が催され、チャペル内では礼拝式である「人間聖化式」がとり行われます。また元気な御老人が自ら研究会を主催されている場合も多く見受けられます。各老人ホームには常勤の司祭が居る場合が多く、他の集会からも定期的に担当の司祭が訪問して、心のケアそして死を迎える為の準備の御手伝いをしています。

日本のキリスト者共同体は昨年創設されたばかりで、まだそのような施設はありませんが、共同体の活動に結び付いた御老人の御世話、或いは亡くなられた方の葬儀・供養などの儀式活動も今後充実して行きたいと考えています。また、将来、日本にもキリスト者共同体の精神の生きる老人ホームが実現するよう努力する所存です。

このような活動のささやかな手始めとして、この度、キリスト者共同体出版局として新設された「涼風書林」から小冊子『死ぬことと生きること』が出版されました。筆者はドイツで約15年間、司祭として多くの御老人と接し、多くの方々の最期を看取って参りました。その経験から、老・病・死は、光り輝く新たな「生」へと向かうプロセスであると実感しております。御一読いただければ幸いです。(こばやしなおき)



小林直生著『死ぬことと生きること』  
涼風書林 / 1,000円(送料別)

『死ぬことと生きること』は一般書店では手に入りません。下記まで御申し込み下さい。

〒101-0061東京都千代田区三崎町3-6-15-201キリスト者共同体内 涼風書林, Tel/Fax03-3221-5111  
<http://www.kirisutoshakuyodotai.org/>  
E-mail: ryofu@kirisutoshakuyodotai.org

自分の死をどのように迎えるかということは、その人がどのような世界観を有するかということにほかなりません。死の真実を知ること、死への恐れへの克服と、浄福に満ちた老いへの準備とも言えるでしょう。

葬儀業者の協会の機関誌に連載された記事によって編まれた本書は、人の死と誕生を人智学がどのように語っているか、その世界観についての恰好の入門書ともなっています。病にある人、看護する人、死者などへの祈りの言葉も収録されています。(編集部)

先号の記事「キリスト者共同体による教育シンポジウム」に誤りがありました。参加者は約80名でした。

息子が小学3年生のある日、学校から帰ってくるなり玄関にしゃがみこんで泣き出しました。胸には虫かごをしっかりと抱えています。ランドセルを背負ったまま息子はしくしく泣いています。わけを聞くと、コオロギを持って学校から帰る途中、友だちに取り上げられ、その友だちが捕まえたカマキリのエサにされてしまったというのです。息子は近所で捕まえたコオロギを教室で飼っていたのです。コオロギは息子の目の前でカマキリに食べられてしまいました。

息子はそのコオロギをととてもかわいがっていました。風邪で学校を休んだ日には、キュウリの輪切りを楊枝ようじにさして欠席の連絡帳と一緒に届けたりしたくらいです。彼は「コオロギさんはほくに捕まえられた甲斐がなかった」と、泣きながら言いました。今までは、捕まえられた甲斐があったと思うくらい幸せなコオロギだと思っていたのでしょう。

「そんなことないよ、コオロギさんはアキちゃんに飼われて嬉しかったよ」と言いながら息子を抱きしめても、彼の辛



## 子育てコラム こどもの時間 おとなの時間

吉田登志子  
Toshiko Yoshida

### コオロギ事件

吉田登志子さんは、横浜の親子サークル「竹の子の会」に二児を通わせる母親を経て、現在は同会のスタッフをされています。実際の子育ての体験に基づいた、ほっと肩の力がぬける「子育ての知恵」をそっと伝授。

さがひしひしと伝わってきます。さてどうしよう。私は悩みました。カマキリの子の家に文句を言おうか。その子は近所でも評判の意地悪だし、直接注意してみようか。学校の先生に何とかしてもらおうか。でも私は、たくさんたくさん考えたあげく何もしませんでした。

私は、息子とともに悲しんだり励ましたりしながら過ごしました。でも、友だちとの間ことは、私が解決してやれる問題ではないと思ったのです。息子はその子をなじるのではなく、自分がこおろぎを守れなかったことを苦しんでいるのです。彼の悲しみも友達への憤りも、それは彼自身が折り合いをつけて解決していくものだし、彼にはその力が備わっていると信じて待つことにしました。

息子はその後、カマキリの子とも遊んでいましたし、また新しいコオロギを捕まえて、大切に飼っていました。大人が手を出している世話を焼くのは簡単です。でも、待つことで、じっと見守ることで、子どもは自分自身で立ち直ることが出来るのですね。



特集1：日本の老後を考える(5)

## オイリュトミーの力、祈りの力

小原純恵(オイリュトミスト)

岡山の老人ホームで毎週開かれているオイリュトミー・クラスがあります。車椅子のお年寄りがオイリュトミーを楽しんでいるなんて、なんだか嬉しくなるようなお話しですね。



### オイリュトミーをすると表情がやわらぎます

ホームでのレッスン初日。ショートステイ用の空き部屋へ10人くらいのお年寄りが車椅子を押されて現われました。暖かいベッドから連れ出されたお年寄りはむっつり顔で、怒気を露わにする方もいらっしゃいました。どうなることかと胃が痛くなる思いをしましたが、その中にふたり、手足が不自由ながらニコニコと笑顔を見せて、わたしの話しにウンウンとうなずいてくださる人がいました。私はおふたりの笑顔に助けられて、なんとかレッスンを終えることができました。

その様子を見ていたホームのスタッフがあることに気がきました。オイリュトミーをする前の険しい顔が、終わってみると穏やかに変化していたのです。それには皆さんも驚かれたようで、隔週で予定していたレッスンを毎週することになりました。

レッスンのためにピアノが用意され、教室も大きな部屋に移りました。オイリュトミーをしている間にベッドのシーツ交換が行なわれますので、今では起きて車椅子に移ることができる方はほとんど出席していただいています。車椅子に乗ったまま、あるいは杖を脇において半円に並び、オイリュトミーのレッスンを始めます。

### 車椅子でもやってみましょう

まず、ピアノにあわせて、集中と開放、三分節の歩みを行ないます。皆の前でわたしが前後へと動きますと、皆は車椅子のまま、前へ進むときはつま先から前へと足を動かして、後ろへ戻るときは踵から後ろへと足を動かします。その姿は、本当に前へ後ろへと歩いているようです。次は母音の練習です。

「<sup>1</sup>」という母音に耳を傾けながら、太陽に引っ張られるように起きあがります。右手を

小原純恵さん：ロンドン・オイリュトミー学校、ニュールンベルグ学校に学び、1991年帰国。スイス・パーゼル近郊のルーカスクリニックで研修を受ける。中国・四国地方で大人のための講座もつほか、幼稚園、老人ホームなどでも指導している。

上に差し出し、「わたしはかけがえのない大切な存在です」。<sup>A</sup>大きく自分を開きます。「指の先から光をいっぱい自分のなかに入れましょう」。<sup>Q</sup>「自分から出ていって世界を愛しましょう」。

八木重吉の「不思議」という詩のなかに響く、特徴のある音を拾いながら動いてみます。震える手をゆっくりと動かす人、片手でしかできない人、じっと見ているだけの人、目をつぶって聞いているだけの人、ほんとうに眠ってしまっている人など、皆さままでです。

「もの忘れをしないように、今のままでいられますように」と<sup>E</sup>の音で、両手をたたくように交差させていきます。エッ、エッ、エッ。「先生、これは痛いな～」「痛い目覚めるからね。さあ、もう一回ね」などと進めていきます。

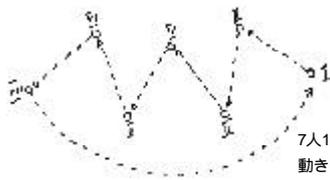
インターヴァル(ある音から別の音への音程)の動きもピアノにあわせて動きます。

- 1度 種が地に落ちました。
- 2度 芽が出ます。
- 3度 葉が出ます、茎が伸びます。
- 4度 つぼみができました。
- 5度 開きます。
- 6度 もっともっと開き、いっぱい開きます。風が吹くと、花びらが飛んでいくほどに。
- 7度 蜂がやってきました。  
「蜂がぶんぶんは難しいな」などとつぶやきながら、7度の動き(指先を小さく振るわせる)をしています。
- 8度 実がなりました。  
ここからまた、種が地に落ちました、と続いていきます。

“度”は音の高さの開きを表わす単位

### 人生でいちばん大切な仕事は？

また、その日に使った詩のなかから、ま



7人1組で左図の軌跡を一度に動かします。上方が観客側。



クリスマスが近づいたので、「ハレルヤ」の言葉を<sup>クラウン</sup>「王冠のフォルム」で動いてみることにしました。車椅子を押しているのは、小原さんのオイリュトミークラスで学んでいる皆さんです。

たは感じたことのなかから、つぎのようなお話もします。「いま、オイリュトミーをしているこの間に、ベッドのシーツをわたしのために交換してくれています。わたしのためにお昼の準備をしてくれています。感謝ですねえ。当たり前だと喜ばませんが、感謝すると喜びになりますね。」

「人生のなかで、いちばん大切な仕事をやる歳になったことにお気づきですか？子どものときは遊ぶのが仕事でした。学生のときは学ぶのが仕事でした。大人になると働くのが仕事でした。そしていまは祈ることが仕事ですね。祈ることとは思うことです。自分のことを、家族のことを思うことは特別なことではありません。ですから、祈るのは普通のことです。他の人のために祈ること、いま、世の中で働いている人たちを支えているのは、皆さんのそういう思い、その祈りです。祈りの支えなしに世の中の人々は働けません。座っていることができるということは、祈ることができるようになったということです。どのような仕事より祈ることは大切な仕事です。ということは、世の中で一番大切なのは、あなたですよ。」

「自分のことを好きですか？よい人だと思っていますか？幼い子どもたちはみんな天使のように美しい心をもっていますよ。あなたも幼い子どもだったときもっていた美しい心、いま、ここにもっていますよ。頭が忘れていただけですよ。」などと話し

ていると、嬉しそうに「はい」と答える人、照れながら「そうかもね」と言われる方もいます。90歳を過ぎた方が、「この歳を過ぎると、願えばそう思うようになるよ」と、逆に教えて下さいました。頭ではそうなるはずだと思ふ私の言葉よりも、歳を経て話される言葉には重みがあります。

リュウマチで手も足も不自由で、身体を動かすたびに痛みがあるはずなのに、いつもニコニコしていらっしゃる方に、「わたしが同じような体になったとき、ニコニコしていただける自信がありません」と伝えると、またニコニコされます。

『年を経てもなお実を結び、いきいきとおい茂る』。そういう方々をホームのなかにさがしてみますと、皆さんがそれぞれに実を結んでおられるのがわかります。

#### また、おいでね

今日のレッスンも終わりが近づいてきました。「もみじ」を歌いながら、ひとりずつに向き合って、銅のボール(クーゲル)を受け渡しをします。口を一文に閉じていた人も、昔懐かしい唄に思わず歌い始めています(唄は季節ごとにかわります)。すると目が笑います。そして終わりに、「神さまの平和がわたしたちの心のすみずみにまで行き渡りますように。神さまの光りが<sup>ほいん</sup>。神さまの愛が」と、祈りの言葉を動かします。

そして、ひとりひとりにさようならとあいさつします。すると、ずっと眠っていた人が目を開けて、「もう、帰るかな？また、おいでね」とおっしゃったりします。

オイリュトミー学校を終えたとき、果たしてわたしが人にオイリュトミーを教えるなんてできるかしらと、不安を口にしたことがありました。そのとき先生が、「あなたに力がなくても、オイリュトミーに力があります」と励ましてくれました。

いまは、「神さま、このオイリュトミーの時間をあなたに捧げます。あなたの力で、集う人々の心を喜びで満たしてください。そして、わたしをその道具として下さい」と祈ります。人生を積み重ね、それぞれにいま実を結ばれている人々の前に、わたしはこの祈りの力がなくては立つことができません。いまでは西井荘長が、見学者の方に身体のリハビリより心のリハビリが大切だと、オイリュトミーを紹介して下さるようになりました。

老人ホームでの仕事を通してわたしのなかに新しいものの見方が開けてきました。どのように生き、動き、存在するべきか、いつも深く考えさせられます。この恵みに感謝します。老人ホームでのオイリュトミーの実践を理論づけることもなく、心のおもむくままに9年が経ちました。オイリュトミーの時間を楽しみに待って下さる人々の笑顔がわたしの喜びとなっています。



不思議

(八木重吉)

o u a e  
心が美しくなると、そこいらが明るく軽げになってくる。  
d i m o ei(アイ)  
どんな不思議が生まれてもおどろかないと思えてくる。  
h i m a oe  
はやく、不思議が生まれればよいなと思えてくる。

## オイリュトミーの2つのエレメント

舞台芸術として生まれたオイリュトミーはその後発展して、教育や保健・医療の分野にも用いられるようになりました。オイリュトミーが「見える言葉」「見える音楽」とも呼ばれるように、言葉と音楽を動かすことがオイリュトミーの基本要素です。それは教育や保健・医療の分野におけるオイリュトミーでも同様です。

言葉(ラウト)のオイリュトミーでは、内面的な魂の世界の表出である母音(aeiou)、風や水の

うねり、堅さやねばりなど外の世界の表現である子音(bmdn...etc.)、それらの異なる質をもった動きを組み合わせながら、豊かな表現をつくり出していきます。

音楽のオイリュトミーでは、音の高さ、インターヴァル、調、リズムなど、音楽を構成するあらゆる要素を身体によって表現します。

人間の魂の内的な体験を身体へともたらすことによって、オイリュトミーは治癒の道具として働くことができるのです。

(編集部)



特集2：エルゼ・クリンク・アンサンブル日本ツアー(1)  
**ご来場に感謝を込めて**  
 オープンフォーラム編集部

ご来場に感謝を込めて

公演は期待を裏切らず、まったく素晴らしい出来でした。オイリュトミーよし、音楽よし、照明よし。若いピアニスト、パツラフさんは大曲「展覧会の絵」をよどみなく、しかも表現豊かに弾ききり、見事でした。ハーブのホリガーさん、ヴァイオリンのコーさんは言うまでもありません。

各会場をはしごする強者も現われ、東京公演では開場1時間前から長い列ができました。お待ち下さった皆さんもきっと満足していただけたと思います。ご来場、ありがとうございます。東京公演をプロデュースして下さったやまさと保育園の皆さん、舞台の陰で働いてくださったたくさんの皆さん、本当にご苦労さまでした。

(フォーラム・スリー)

舞台写真すべて：相川大助



「展覧会の絵」のガイド役に扮するレーバーさん  
 “わかりやすい演出で心おきなく楽しめた”と評判の作品

EURHYTHMIE



エルゼ・クリンク・アンサンブル総監督  
**ミハエル・レーバーさんに聞く**  
 オープンフォーラム編集部 / 訳：高橋弘子

日本ツアーの最終地福岡での公演の終了後、シュトゥットガルト・オイリュトミー校の理事であり、エルゼ・クリンク・アンサンブルの総監督を務められているミハエル・レーバーさんにお話をうかがいました。

Q. 今回の公演でとくに印象に残ったことはなん  
 でしょうか？

私たちのオイリュトミー・グループの名称は、グループの創立者であり、長年ともに活動していたオイリュトミスト、エルゼ・クリンクの名前を掲げています。彼女は子ども時代にルドルフ・シュタイナーによって見出され、オイリュトミーへと導かれました。彼女がいつも心にかけていたことは、オイリュトミーを芸術として世界に広げることでした。私が内にもっているのも、彼女と同じ衝動です。私は、グループの仲間とこの意味でよい協力関係を築けるよう心がけています。グループ構成員は、毎回少しずつ変わっています。経済的な理由から、昨年、人数を減らさざるを得ませんでした。しかし私たちは、喜びと努力のうちに仕事をしています。

日本のツアーでとくに印象が強かったのは、オイリュトミーに対する人々のオープンな姿勢でした。物質的な機械文明が発達しているにもかかわらず、日本には精神性が強く生きているように思われます。



音楽作品に重点がおかれた舞台は、適度に演劇的な表現も加えられ、初めての方にも分かり易い構成に仕上げられました。初めて観る方でも心から楽しめ、オイリュトミーをよく知る人も目を奪われるような希有な舞台、“これぞ芸術”という舞台を、ご来場の皆さんは胸いっぱい堪能することができたのではないのでしょうか。日本ツアーの後引き続き上演された韓国(ソウル)、タイ(バンコック)の両公演も、大盛況だったとかがっています。アンサンブルの皆さんに、ねぎらいの言葉を贈りたいと思います。



Q. 今回のすばらしい音楽家のラインナップはどのように決まったのですか？

ホリガー女史との結びつきは、登山中に転落して大けがしたチェロ奏者を、私が毎週オイリュトミーの教室に招いて演奏してもらったことから始まりました。このチェリストの困難な時期に、それは大きな助けとなりました。そのことに対する感謝から、ホリガー女史は私たちオイリュトミー・グループの演奏を引き受けてくれることになったのです。このようにして、イサン・ユン作曲「独奏ハープのためのイン・バランス」の作品はできたのでした。それ以来、この偉大なる芸術家ホリガー女史との友情が続いています。ヴァイオリニスト、コー・ガブリエルの協演は、那須みふじ幼稚園の高橋弘子さんのおかげで実現しました。ローレンツ・パツラフは、シュタイナー学校の生徒です。シュトゥットガルトの青年音楽祭で彼のピアノを聞いて、私はことのほかその才能が秀でていると感じました。彼は2度ほど私たちのオイリュトミーのアメリア・ツアーのワークショップで演奏してくれています。リュディガー・フィッシャー・ドルフは長い間の友人であり、オイリュトミーの同僚です。

Q. 舞台中央の2本のヴェールはツイン・タワーをモチーフにしたものですか？

舞台の大きな背景の垂れ幕には、“偶然”によってツイン・タワーができました。もう何年もこの垂れ幕を使用しておりますが、今回のことはことのほか象徴的に受け取っています。

Q. プログラム構成の変更に、テロ事件は影響し

たのですか？

私は今回、音楽家たちのために、まず公演の方向性を音楽作品を中心に定めていました。ところが、9月11日にあの事件が起きて、私はルドルフ・シュタイナーによる“時代霊ミカエルの言葉”が頭に浮かんできました。どの方向に進んでいくかは、ひとりひとりの人間の自由です。ルドルフ・シュタイナーは決して道徳を説きません。しかし、ひとりひとりの意識に問かけます。それは、現代の人類の言葉なのです。

Q. 日本のオイリュトミストの皆さんにお伝えしたいことはありますか？

日本のオイリュトミーを、私はほとんど知りません。きっとまだまだ多くの試み、練習すべきことがあるでしょう。しかし、日本でたくさんのおイリュトミストが活動しているということは、本当に素晴らしいと思います。小規模のオイリュトミー公演があちらこちらであるようですね。私は、民族にかかわらず、オイリュトミーそのものの源泉から常に試み前進していくことが大切だと確信しています。それによって私たちは、まったく異なった民族をその本質と真実において認識し、体験できるのです。言語の本質は、同時に、天使が私たちに語りかけることなのです。言葉を語るとそこに、天使の働きがあるのです。

Q. ご覧になった皆さんにメッセージをいただけませんか？

長文のドイツ語によるオイリュトミーの作品でも、日本の聴衆はまったく静かに、そして注

意深く私たちをみていてくれました。ここには、少しばかり、ヨーロッパ人と日本人の違いがあるように思われます。ドイツ、ヨーロッパでは、人はすぐにそれが何を意味しているのかが知りたがりです。そしてそのためにしばしば、直接的な体験が妨げられてしまいます。言葉のなかに概念として生きているものは、オイリュトミーにおいては動きになるのです。次のようにも言えるでしょう フォルムと動きが一体となると。

ありがとうございました。



総監督：ミヒヤエル・レーバー

シュトゥットガルトで生まれ、ルドルフ・シュタイナー自らが設立した最初のヴァルドルフ学校に通う。エルゼ・クリンクとともにオイリュトミーを学び、ベルリンのインディペンデント・オイリュトミー・アンサンブルで初舞台を踏んだ。その後ドイツ中部の工業地帯でヴァルドルフ学校の子どもたちに教える。以来、エルゼ・クリンクの舞台グループのメンバーであり、シュトゥットガルト・オイリュトミー学校の主任教師を務める。南北アメリカ、南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランド、日本、韓国等、数多くの国々で公演し、同時にワークショップを開く。1989年にエルゼ・クリンクよりシュトゥットガルト・オイリュトミー学校の共同理事に任命され、現在にいたる。



今回のプログラムは9月11日の事件への追悼の意味を込めて上演されました。



特集2：エルゼ・クリンク・アンサンブル日本ツアー(2)  
**ご来場に感謝を込めて**  
オープンフォーラム編集部



# EURYTHMIE

## 平和の使者としてのアンサンブル

定者吉人(広島虹の学校)

広島に子どもの権利を重視した「虹の学校」づくりを行なっている。今回のツアーの呼びかけ人であり、広島公演、京都公演の運営に携わった。<http://www.hiroshima-niji.com/>

エルゼ・クリンク・アンサンブルによる2001年の日本公演がすべて終わりました。

今回は京都公演の翌日が広島公演ということで、京都から広島への移動は貸し切りバスを用意しました。ところが、ハーブのウルスラ・ホリガーさんが背中中の調子が悪くて長距離のバス旅行はできない、ということから、私が新幹線でホリガーさんと京都から広島までごいっしょすることになりました。新幹線での移動の途中、ホリガーさんは、日本の憲法9条に触発されて始まったアメリカの「憲法9条の会」についての英字新聞の記事の切抜きを私に見せて、戦争は絶対にいけない、と実に厳しい口調で私におっしゃいました。

私はその言葉を聞きながら、1997年の12月、エルゼ・クリンク・アンサンブルの日本公演を促すためシュツットガルトへ赴いたときのことを思い出しました。そのとき私はレーバーさんから、エルゼ・クリンク・アンサンブルの1981年の日本ツアーの際、まだ健在だったエルゼ・クリンクさんは、京都から福岡

へ移動する途中、他のメンバーと分かれて広島で下車し原爆慰霊碑を訪問されたとお聞きしたのでした。

またそもそも私がエルゼ・クリンク・アンサンブルを日本に招聘しよう

と思ったきっかけは、偶然に見たエルゼ・クリンク・アンサンブルのアメリカ、サクラメントでの公演でした。そのとき私は、圧倒されるほどに美しい演技と照明に感嘆しつつ、私が広島からサクラメントに来て彼らがドイツからやって来たという偶然をただの偶然とすませるべきではない、彼らを平和の使者として広島に迎えるべきだと強く感じたのでした。

今回の日本ツアー。9月11日の同時多発テロをきっかけに世界が、そして日本が戦争に巻き込まれていこうとしている、その運命の時にあたり、もしかしたら天上からエルゼ・クリンクさんが、私たちの平和への働きをうながし励ますために、この年、この時を選んで、エルゼ・クリンク・アンサンブルを日本に、そして広島に遣わしたのではないかと私は思うのです。

私たちは、まもなくインドから、非暴力による平和の実現を目指すアーリヤ・バラドワージ(バードワ)さんを日本に迎えます。私たちに平和への働きを促す天上からの動きは、いよいよ力を強めていると私は感じます。



## 初めてみたオイリュトミー

馬場睦子(主婦)

神奈川の某シュタイナー幼稚園に子どもを通わせている母親。音楽家として音楽療法を勉強中。

私には、オイリュトミーの知識はまったく無いに等しい。東京厚生年金会館で上演された公演で、オイリュトミーを初めてみた。どうやら厳しい約束事(のり)に則って、その上に個々の芸術性を色づけして踊っているようだ。

主旋律の音程やリズム・コードなどは、たとえば、手の動きで音程を、足の動きでリズムを、身体の傾きでコードを、というように見え、耳の不自由な人にも曲の全容がわかってしまうのではないかと思うほど、法則性の存在をはっきりと感じ取れる。

というわけで、最初のステージはその法則性を嗅ぎとろうとして、名探偵よろしく目と耳を総動員する。頭が異常に疲れてしまい、ちっとも楽しめない。これじゃいかん、ちょっとスタ



## 岐路に立つオイリュトミー芸術

～ 東京公演を振り返って～

中谷三恵子(オイリュトミー療法師)

現在、東京、神奈川を中心に、幼児から大人まで、数多くの講座を持ち、芸術オイリュトミーと教育オイリュトミーを指導している。またセラピストとして治療オイリュトミーも行なっている。



2001年11月4日、東京は前日の冷たい雨もあがり、<sup>りょうりょう</sup>晴々たる秋晴れとなりました。オイリュトミー公演は午後2時開演。朝9時すぎから出演者、スタッフともども準備を開始。開演1時間前からすでに観客が並び始めたという連絡が入るも、館内は至って静か。約1,000人のお客様を迎え、定刻通り<sup>どんちよう</sup>緞帳が上がりました。

私は舞台裏の諸々の手伝いをする仕事上、上演中は舞台の袖際で見守っていました。ベートーヴェンのダイナミックなフォルム、イサン・ユン

「イン・バランス」の振り付け、ムソルグスキー「展覧会の絵」の構成等は、いかにもシュトゥットガルト・オイリュトメウム(エルゼ・クリンク・アンサンブルが拠点をおくドイツのオイリュ



トミー学校)らしく、14年前にこの学校を卒業した私は懐かしさを感じました。今夏、ドルナツハ(スイス)で催された「サマー・フェスティバル」では、1週間に32のオイリュトミー公演が上演されました。その評価は、世界中のオイリュトミー関係者の間を飛び交い、私も耳にしました。全体の流れとしては、実験的でモダン、タブーへの挑戦といった傾向が強かったようです。そのなかで、シュトゥットガルト・オイリュトメウムは古典的様相を呈し、かえってオイリュトミーの形式を再認識させたと聞いています。

今回、ミハエル・レーバー氏と久しぶりの再会を喜び、ゆっくりと語り合うことができましたが、話題はやはりこの方面へと転回していきました。オイリュトミーの現在の潮流についての私の問いかけに対して彼は、「人は何でも試すことは可能だ。しかし、問題はそこに霊があるかどうかだ」と、答えました。私はただ、無言で頷きました。「オイリュトミーとは何か」が、今ほど真剣に問われた時はかつてありません。



ルドルフ・シュタイナーは、1913年8月28日のオイリュトミー初公開の際、「美とは高次の世界でたゆたいつつ生じているものの、直接的表現である」と述べています。この「たゆたいつつ生じているもの」こそ霊的内実であり、「直接的表現」こそ瞬時にして消え去る形式だと私は思うのですが、この両者の架け橋にオイリュトミーの未来はかかっているようです。

ンスを変えてみる。

脇を開いてハーブの音の風を受け、耳を後ろ向きにつけかえてヴァイオリンの振動を聞き、ふたつの目を<sup>まあい</sup>眉間の上にひとつに重ね合わせて眺めてみる。実に愉快。

気になって仕方なかった厳しい約束事の型は、型を取ったままひらひらと自由度を増し、無限の想像を駆り立てる。朗読によるステージはすばらしい。「ことば」のもつ底力に震え、「言霊」の存在を思い出し、聞きかじったドイツ語の単語がまばらにわかったのはずなのに、踊り手によってぜ～んぶ解き明かされた気になっている。

オイリュトミーの基本姿勢はどうやら中腰のようだ。そういえば、東洋の格闘技もスポーツと呼ばれる分野も基本姿勢は中腰だし、能の摺り足も中腰だ。中腰のもつ自由度に驚く。踊り手が舞台中央の奥に引いていきながら、中腰からだんだん低い姿勢になると、その体は、どこまでもどこまでも小さくなってゆき、豆粒のように錯覚する。逆に、踊り手が中腰から両手を徐々に広げて高く伸びながら舞台前方に進み出ると、どん

どんどん大きく高く広がって、いったいこの人はどこまで大きくなっていくんだろうと圧倒される。

ムソルグスキーは圧巻だ。前半は気になっていた若いトゲのあるピアノの音が、厚い響きに変わる。現代舞踏の<sup>ほんほう</sup>奔放な表現とは対照的な「型」の表現であるにもかかわらず、エロスさえ感じる。幕が閉じ、拍手をしながらも、私はなんだかよくわからなくなっている。

どうしてヒトは、様々なアプローチによって魂を解放させようと、激しく求めるんだろう?この、一見奇妙な身振りは、どんな必然に裏打ちされているのか私にはわからない。世界中の伝統芸能がもつそれぞれの特異性と同一ように、オイリュトミーもひとつの古典となりうるのだろうか?





“クリスマス劇”を日本で  
**オーバーウーファー村のクリスマス劇**  
 隅田みどり(オイリュトミスト)



幼子を訪れる羊飼いたち。クリスマスには生誕劇が演じられることが多いようです。

「クリスマス劇」と言うと、多くのヴァルドルフ学校や幼稚園では、中世のころから伝承され、民衆によって上演されてきた素朴な素人劇のことを指します。このクリスマス劇を上演する試みが日本にも始まっています。聖夜に向けてご紹介。

## 横浜のクリスマス劇

隅田みどり

オイリュトミスティン。横浜・東京を中心に活動をしています。

毎年のようにこの劇を上演するようになって、今年で年を迎えようとしています。横浜シュタイナー教育の会、シュタイナー子どもの園を育てる会の父母、私の受け持っているオイリュトミーのクラスや友人に呼びかけ、ともに学びながら演じている「クリスマス劇」です。

毎回毎回、それぞれの人が、役者も観客も、この劇の中に新しい言葉を発見し、真実に気がつき、心を打たれます。14、15、16世紀までさかのぼる、違う国の片田舎の強い方言で書かれたこの劇が、アジアの小さな幼稚園生や小学生のために上演され、しかも涙や笑いを呼び起こし、人々がその言葉の深さに胸を打たれるというように、私は驚きを感じます。

劇の導き手である「星の歌い手」の、神へ、聖霊へ、幼子へ、ヨゼフとマリアへ、星々へ、そして観客へ、長く暖かいユーモアに満ちたあいさつからこの劇は始まります。彼は星の世界と私たちをつなぐ人であり、また役者と観客をつなぐ人でもあります。観客はこのあいさつを見ながら、ゆっくりとこの劇のなかへと入っていきます。

次に登場する天使は、観客に向かい、この劇が決してつくりごとではない、と話します。マリアは神に従順な者として、そしてヨゼフが神とともに彼女を守っていく姿を続く場面のなか

で私たちは見ます。幼子の誕生の後、劇の後半、心明るい元気な羊飼いたちの楽しいやりとり、観客はほっとし、心より笑います。しかし、幼子イエスの前にひざまずく彼ら羊飼いの、何と経験で素朴な姿でしょう。

私は、この劇にひとりの主役もないように思います。ひとりひとりが自分の役を生きていることによって、この劇ははじめて息吹き、そして歌いながら客席をまわるうちにいつしか観客もともに星の歌を聴き、ともに心が歌い出すのです。

深い雪に閉ざされたドイツの暗い冬のなかで、人々がどんなに心待ちにして聖夜を迎えたか、そして大切にこの劇を上演していったか、私たちは思いを馳せることができます。そして今なお、この人工的な光に囲まれた騒がしい時代に、私たちの心にこんなに直接にこの劇が訴えてくるのに驚くのです。

私たちは毎年、登場人物のひとり、羊飼いたちの言葉を自分のものとして繰り返さねばならないでしょう。「彼はここ地上に貧しく来られた。私たちを哀れむために。天国ではたくさんのお天使に囲まれ、豊かだったろうに。私たちのためにそれをやめて、そうやって人が傲慢さに背を向けるように、そういう華やかさや飾り立てるのではなくて、慎み深く生きていくように導いてくださるのだよ。」

キリストが千回ベツレヘムで生まれても  
 あなたのなかに生まれないなら  
 あなたははまだ永遠に失ったままであろう  
 アンゲルス・シレジウス

横浜のクリスマス劇について  
 横浜での上演は12月22日に行われますが、席数などの関係から、一般に向けた公開はないそうです。クリスマス劇上演に関心をお持ちの方には、日本語訳脚本が用意されています。特別なお関心から見学を希望される方も相談されるとよいでしょう。

『～古い民族伝承による聖夜劇～  
 オーバーウーファーの聖夜劇(1,500円)  
 K.J.シュレーアーにより伝えられてR.シュタイナーによって書かれた脚本にシュタイナーの短い論文を添えて、「楽園劇」「キリスト生誕劇」「三賢王」全三部作を収録。訳：隅田みどり/森尾朋子。  
 葉書に送付先を記してお申込み下さい  
 隅田 〒227-0033青葉区鴨志田町553-13

京都・クリスマス劇団フロンデ  
 京田辺シュタイナー学校では先生を中心にしたクリスマス劇団フロンデが上演しています(台本は津吉靖さん訳による)。こちらは、一般公開の部も用意され、12月16日京田辺市商工会館キララホールでたくさんの方が楽しまれたとのこと。

東京シュタイナーシュールでも  
 東京シュタイナーシュールでもクリスマス劇が上演されています。12月21日と22日の2回公演、東京シュタイナーシュール・ホールにて。こちらは学校の子どもたち、父母に向けての上演です。

## オーバーウーファー村のクリスマス劇

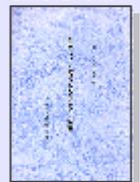
数あるクリスマス劇で、とくにオーバーウーファー(オーバールーファーとも)の劇が好んで上演されるようになったのは、R.シュタイナーがこれを取り上げて上演したことによります。シュタイナーは、彼の先生だったカール・ユリウス・シュレーヤー教授がヨーロッパ中部の村落で採取した、当時失われつつあった伝承劇を高く評価していました。人間の精神的な進化やキリスト生誕にまつわる観知が、知性に汚されていない豊かなイメージを通して語りかけてくるからでした。

かつて聖職者が演じていたものが、やがて民衆に受け継がれ発

展していった劇は、素朴な村人たちにとってことのほか神聖な祝祭として大切にされてきました。演じ手に選ばれた若者たちは、酒断をし、いさかいごとを慎むなどして、素朴ながらも心からの厳かさをもって、聖なる劇を準備していったそうです。(日本の農村にこういう風物を求めてみるのも興味深いですね。)

アドヴェント(待降節)から三賢王の日(1月6日公現節)にわたって上演される3つの物語、「楽園劇」「キリスト生誕劇」「三賢王」の劇は、シュタイナーによる上演以降、世界中のシュタイナー学校や病院、農場などで上演されるようになりました。ヨーロッパでは近年、多忙な教育活動に追われ上演をやめる学校も増えてきたそうですが、9月のテロ事件に触発され、今年はほとんどの学校でクリスマス劇が復活したという話も伝え聞いています。(編集部)

もっと知りたい人は



R.シュタイナー講演録『聖き夜との考えとわたしなる秘密』(鈴木一博訳、900円) 日本アントロポソフィア協会 Tel.&Fax 03-3205-9645



連載第4回

# CORRINE《コリン》からのメッセージ

大塚直美 (ぼっこわば耕文舎)

ぼっこわば耕文舎 コリン 大塚直美  
〒869-1404熊本県阿蘇郡長陽村河陽3906  
Tel.09676-7-4373/Fax 09676-7-2534  
E-mail corrine2000naomi@hotmail.com  
Webhttp://www1.interq.or.jp/~pokko/

## 精油たちのもつ目に見えない力に癒される。

### ラベンダーの治癒力は感動的です

ぼっこわばの 自然の薬箱 の中で、いちばん活躍するのは、何といってもラベンダーオイル(精油)。ちょっとしたかすり傷や切り傷、やけど、打ち身、筋肉痛などに良く効く、まさに万能オイルです。

ぼっこわばのアロマセラピーは、このラベンダーオイルから始まりました。畑で仕事をする人たちの背中や腰の痛みには、原液をすり込んでマッサージをします。ラベンダーオイルには、痛みを和らげる特性があるのです。また消毒作用もあるので、切り傷やすり傷がある時は、汚れを水で洗った後、原液をぬることもあります。やけどをした時の救急薬のひとつでもあります。

精油の中には、原液のまま使用できるものはほとんどありませんが、このラベンダーとティートリーの二つだけは原液のまま使えます。また、ラベンダーは、経通作用があるため妊娠初期の頃はご使用できません。ご家庭で使われる時には、このことによく気をつけて、ご使用ください。

またラベンダーは、虫よけや虫さされにも、とてもよく効きます。ハチに刺された時、ヘビにかまれた時にも大活躍です。ぼっこわばの祥子さんが、スズメバチにさされた時、傷口にバシャバシャふりかけると、10分ほどで痛みがとれ、はれもそんなにひどくなくてすみました。この時には、ラベンダーの治癒力に誰もが感動しました。ヘビにかまれたり、スズメバチに刺された時には、すぐに病院に走らなくてはなりません、病院につくまでの応急手当てとして、最良のものとなるでしょう。

ラベンダーやティートリーのほかに、愛用している精油があります。それはユーカリです。冬になって、ストーブをつけ、部屋が乾燥している時には、ストーブの上に鍋をかけ、その中に精油を数滴落とします。特に風邪をひいている時には、ユーカリとラベン

ダーをいっしょに数滴ずつ落とすと、鼻やのどや肺がとても楽になります。

ユーカリは、強力な精油です。今では香りがマイルドな子ども用のユーカリもあるので、子どもさんのいる家庭ではそういった優しい精油を使われることをおすすめします。また、ローズマリーは、すばらしい消毒作用があり、空気浄化にも効果的です。フランスでは、伝染病が流行している時、病棟で焚かれたこともあるそうです。風邪の時期や、病気で寝こんでいる時に、お部屋の中で、アロ



クリスマスガーデンを終えた子どもたちが、外テーブルにりんごロウソクを飾って余韻を楽しんでいます。

マポットなどを利用してたいたり、ストーブの上のおなべのお湯の中に落としたりすると、症状がやわらぎます。

ただし、ユーカリもローズマリーも、ホメオパシーの薬剤を解毒してしまうことがあるので、ホメオパシー治療をされている方はご注意ください。加えて、ローズマリーも妊娠中の方はさけたほうがよいでしょう。

寒い冬の風邪の時期には、本当に効果的な精油たちです。是非、ご家庭で常備するとよいと思います。

### 精油は、植物の精霊です

精油は、「植物の精霊(魂)」とも呼ばれています。ひとつひとつの香りに植物の生命力、エネルギーが濃縮され、それによってわたしたちは、わたしたちの中にあるものをゆり動かされるのです。とどこおってい

### コリンからご案内

コリン精油セット	5,000円		
ラベンダーファイン(プリマヴェッラ)	1,500円	デメター	5ml
ユーカリ 子ども用(天の香り)	1,500円	野生採取	10ml
ローズマリー(天の香り)	2,000円	オーガニック	5ml

送料は1セット270円、2セット390円です。今ならアロマケア小冊子プレゼント!お申し込みは コリンがフォーラム・スリーまで。



るものは、精霊の呼びかけに目をさまします。そして精霊たちの助けを借りて、自らの治癒力を再び呼び起こすのです。精霊とわたしとの共同作業は、いつも感動と喜びとともに始まります。精油を使う時、香りだけではなく、その香りを生んだ植物の姿、茎や葉の様子、花の色や形などのすべてとそのものもつエネルギーを感じます。目に見えるものと、目に見えないもののすべてが精油には入っているのです。そのことを感じる時、私の心はふるえます。

精油のもつ治療の力は、決して香りだけのものではなく、その植物の生命力、エネルギーを含む精霊そのものであることがわかります。私たちは、目に見ることができない不思議な力によって癒されるのです。その不思議な力をもつ植物と植物の力を受けとめたり、共振したりできる人間それぞれの存在は、精妙ですばらしいものです。

私たちは、大きな強い力、大きな動きによって治療されるのではなく、目に見えないかすかな静かなエネルギーとの共振によって、癒されるのです。治療の過程は、植物(自然)と人間の会話のようにも感じます。

私の感じたこと喜びと感動をみなさんにも感じていただけたらと思います。また日々の生活の中で、心身にやさしい植物療法がもっともっと身近なものになりますようにと祈っています。

「自然の薬箱」のお話は、まだまだ続きますが、今回は、「植物の力がいっぱいつまったフラワーオイルについて」のお話です。お楽しみに。

大塚直美さん：6年前より九州・阿蘇にあるぼっこわば耕文舎に参加、「未病院」を目指し、コリンを通して治療活動を実践中。

「12月8日に福岡・こひつじ幼稚園で歌のコンサートを開きました。プログラムは、天使のパンと、黒エ・イエズ、アヴェ・マリアなどの宗教曲と、ヒト霊歌。近々、ライブのCDも出す予定です。みなさんに聴いていただけたらうれしいです」。



著者による新刊のご紹介  
**『パン屋のお金と  
 カジノのお金はどう違う？』**  
 ミヒャエル・エンデの夢見た経済・社会』  
 廣田裕之(地域通貨研究)



『パン屋のお金と  
 カジノのお金はどう違う?』  
 廣田裕之  
 オーエス出版社 / 1,500円

経済大国と言われて久しい割にはその豊かさを実感できない日本。逆にグローバル化の波を受けてリストラが行われ、会社に残った人は仕事に追われて人生を楽しめない。かと思えば世界には数億人もの人が飢餓で苦しんでおり、発展途上国では低賃金で長時間の労働を強いられている人がたくさんいる。そして、経済成長のために貴重な環境が失われている。こんな経済、どこがおかしいと思いませんか？

『モモ』や『はてしない物語』でおなじみのミヒャエル・エンデは、現代社会、特にお金や経済の問題についても考え続けてきた人でした。お金の問題というと難しそうですが、誰もがお金を使って生活をしており、このお金

に苦労しているわけですから、このお金の仕組みを知ることで、なぜ今の経済では誰も幸せになれないかがわかります。

この本は、お金の問題になじみのない人向けの入門講座から始まり、エンデが生前残した言葉から今の経済の問題、特に一握りの人だけが金持ちになり、残りの多くが貧しくなってしまうのかや、なぜ自然環境よりも経済成長が優先されてしまうのかが明らかにされます。そしてこのような今の資本主義経済とも、ソ連や東欧諸国などで80年代末に破綻した社会主義経済とも違う新しい経済のモデルとして世界で広がりつつある地域通貨、特にアルゼンチンのRGTを紹介しています。

また、この地域通貨などの考え方に影響を及ぼした経済学者、シルビオ・ゲゼルの考え方についても少し紹介されています。彼はお金の問題のほかにも、どうしたら女性が男性から経済的に自立できるかについても考えており、その例として「減価するお金」や「母親年金」が紹介されています。また、この「減価するお金」が実際に使われた例として、オーストリアのヴェルグルで1930年代に使われた「労働証明書」が紹介されています。

エンデを別の角度から紹介したこの本は、お金や経済の問題が難しいと思っている方にオススメの一冊です。

廣田裕之

1976年福岡生まれ。現在東京大学大学院総合文化研究修士課程に在籍し、地域通貨を研究中。高校在学時よりミヒャエル・エンデの思想、とくに社会観や経済観に深い関心を持ち、エンデ独特の世界観が漂う文学作品の基盤について勉強を始める。スペインやポルトガル、中南米の文化に強い関心をもっていたこともあり、世界の地域通貨の事例のなかでも、とくに南米のアルゼンチンのRGTを中心に調査している。ネット上では、シルビオ・ゲゼル経済学の紹介も行なっている。<http://www3.plala.or.jp/mig/>

### ゲゼルとシュタイナー

最近、マスコミにも頻繁に取り上げられるようになり、少しずつ身近な話題になりつつある地域通貨。今回ご紹介した本の著者である廣田さんは、ゲゼル経済学や地域通貨のメーリングリスト等の運営を通して、日本各地に広がった地域通貨の試みの火付け役を担ったおひとりです。

シルビオ・ゲゼルのルドルフ・シュタイナーと同時代に生きた人物ですが、この本のゲゼル経済学の紹介を読むと、シュタイナーの社会論と重なる部分が多いのに驚きます。地域通貨が社会にもたらすものは何かを考えると、その背景にあるこのような同時代人の働きを知っておくと、より興味が増すと思います。入手可能なシュタイナーの社会論には、『経済学講義』(筑摩書房)、『社会問題の核心』(社会の未来) (イザラ書房 等)があります。

(編集部)



『色と形と音の瞑想』  
 R.シュタイナー講演録 / 西川隆範訳  
 風濤社 / 1,900円

色彩、フォルム、音の精神的な背景に触れたR.シュタイナー講演録からのダイジェスト。

『シュタイナー教育とオイリュトミー  
 動きとともにいのちは育つ』  
 秦理絵子  
 学陽書房 / 2,000円

東京シュタイナーシュールの専科教師による教育オイリュトミー実践の報告。



『いかにして超感覚的世界の  
 認識を獲得するか』  
 R.シュタイナー著 / 高橋巖訳  
 ちくま書房 / 1,200円

テオソフィー  
 『神智学』、『神秘学概論』と並ぶR.シュタイナーのエソテリック基礎文献の文庫化。

『灰かぶりに秘められた意味』  
 志賀くにみつ著  
 歩論社 / 定価600円  
 一般書店流通はありません  
 注文は宮川まで (Tel.042-577-6613)

大人にも子どもにもメルヘンを。人智学のメルヘン論に基礎をおいた、シンデレラ論。





著者による新刊のご紹介  
**『ゲートからシュタイナーへ』**  
 高橋明男( NOA企画 )



『ゲートからシュタイナーへ』  
 高橋明男著  
 NOA企画 / 1,000円(送料別)  
 一般書店流通なし。  
 申し込みは下記・NOA企画へ

NOA企画の冊子『ゲートからシュタイナーへ』がようやく完成しました。NOA企画は「アントロポゾフィー(人知)の新しい

方向づけ」を目指すNOA企画(Projekt zur Neuorientierung der Anthroposophie)の大きな柱として、「霊学のための市民大学」があります。

そこではすべての参加者が対等な「探求者」として、アントロポゾフィーの研究・育成に関わり、新しい思想形成のあり方を模索していきます。そのような一人ひとりの主体的な精神活動を基盤として、アントロポゾフィーを様々な市民運動とつなげる道を探っていきたいと思います。この「霊学市民大学」の具体的なかたちとして、『NOA通信』の発行を考えています。そこに至る足がかりとして、この冊子をつくりました。

この冊子は、「霊学市民大学」への呼びか

けとして、僕自身の10年越しの試行錯誤をまとめたものです。僕はなんとかシュタイナー思想の基本を理解しようと、シュタイナーの著作とシュタイナー以外の書物の間を行き来している間に、ゲートからシュタイナーに受け継がれた理念が自分なりに見えてきました。それをまとめたのが本冊子『ゲートからシュタイナーへ』です。

まずはこの冊子の内容を議論のたたき台にして、疑問や反論、さらなるアイデアなどを寄せてもらいながら『NOA通信』の創刊につなげていき、さらにアントロポゾフィーの育成・発展をみんなで対等に実践していきたいと思います。関心を寄せて頂ければうれしいです。

『ゲートからシュタイナーへ』入手方法  
 頒価1,000円に送料180円を加えて、下記郵便振替口座まで。NOA企画01750-2-32423  
 NOA企画連絡先：Tel.&Fax099-244-5138  
 〒892-0871鹿児島市吉野町3355-33-B102

**「人類の精神作業」に参加すること**

ゲートからシュタイナーへ受け継がれた理念、シュタイナーによって「キリスト原理」と名づけられたその理念を、僕が「私はひとつ」という言葉で表現しました。この冊子のなかで、僕が明らかにしようと試みたのは、この「私の原理」が実は「生命原理」であり、それは現代の生命科学の見方とも触発し合う可能性を含んでいることです。また最近のフェミニズムの視点、さらには鈴木大拙が『日本の霊性』のなかで述べている「われ一人」という思想にもつながるものだと思っています。

これまでの歩みのなかで、丸山圭三郎著『生命と過剰』や井筒俊彦著『超越のこぼれ』といった本は、僕にシュタイナー思想の現代性を確信させてくれました。丸山氏が述べている「実体論」という見方によって、シュタイナーが「真理とは人間から切り離されて存在するものではなく、個々人の認識によってその都度新たに創造される」と言った意味も分かってきました。カッシーラー著『イギリスのプラトン・ルネサンス』を読んだときは、シュタイナーは明らかにこれらの新プラトン主義者たちのたたかいを引き継いでいると感じたものです。そしてドイツの物理学者・哲学者カール・フォン・ヴァイツゼッカーが、ゲートの『自然科学論文集』(ハンブルク版全集)の後書きのなかで、「ゲートは新プラトン主義の伝統のなかから発言している」と書いていることも腑に落ちたのです。

シュタイナーは『哲学の謎』の冒頭で、人間は自分の人生のなかで遭遇するさまざまな問題について悩み、考えることを通じて「人類の精神作業」に参加していると述べています。僕の考える「霊学のための市民大学」は、一人ひとりがこの「人類の精神作業」に意識的に参加することにほかなりません。先日、作家の大江健三郎氏がニュースステーションで、人間は「まなび(まねび)」「おぼえる」「さとる」という知のプロセスを経て「開かれた個」に至るという話をしていました。これはシュタイナーが『神秘学概論』のなかで述べている自我の発達三段階としての「感覚魂」「悟性魂」「意識魂」の定義とまったく重なっていると思います。でも、僕にとって大切なのは、大江さんとシュタイナーの一致ということよりも、同じ思想がさまざまな個人を通じてさまざまな形で現われることの中かに「人類の精神作業」の動きを感じることなのです。今回の冊子は、シュタイナー思想をゲートから掘り起こし、さらに外に開いていくための僕なりの試みの第一歩です。

(高橋明男)

『人が生きること そして死ぬこと』  
 大村祐子著  
 ほんの木 / 1,400円  
 大人のためのシュタイナー教育講座、シリーズ  
 No.2、ニカノア・バーラスさんの紹介も収録。



創作おはなし絵本シリーズ  
 1『雪の日のかくれんぼう』  
 2『ガラスのかけら』  
 大村祐子著  
 ほんの木 / 各1,680円  
 ひびきの村で語られるお話を各作収録。



**番外編**

『ハッピー・シングルふんぞり返る』  
 子安フミ著  
 リットーミュージック / 940円  
 ロックミュージシャンとして活躍する子安フミさんのエッセイ集。





インフォメーション  
クリップボード・コーナー  
事務局に届いた全国の情報をご案内します。

オイリュトミー公演「親と子のためのクリスマスのお話」/ 国立市民芸術小ホールスタジオ12月21日(金)15:00~/ 出演 高久真弓、安藤幹人/ 大人2,000円、子ども1,000円/ シュタイナーキキダーガールテン星の子 Tel.&Fax 0424-80-1600(西澤)

親子に贈る「オイリュトミー・クリスマス公演」/ 相模原南市民ホール12月25日(火)14:30~/ 貧乏神と福の神ほか/ 出演 池谷恵子、小川陽子ほか/ 大人2,000円、子ども1,000円/ 佐藤 Tel.&Fax 046-272-6495

北日本シュタイナー教育講座 / 中学1年生の発達段階/ 2002年1月12日~14日/ 北海道・函館市/ 講師 近藤嘉宏、加納栄利子/ 20,000円/ 神龍治 Tel.&Fax 0138-51-7230 / ai-ai-jinjin@h5.dion.ne.jp

子どもの生きる力を育む連続講演「子どもの教育を選べる社会」/ 急激に変化する世界の教育事情 / 立教女学院短期大学2002年1月19日(土)14:00~15:30/ 講師 小貫大輔(CRI代表)/ 本当に生きていく力をもつ子どもを育てる会 Tel.&Fax 0422-49-6280(月~金10:00~16:00)

吉澤明子講演会「虹に世界を見る」/ すみれ幼稚園2002年2月3日(日)14:00~/ 前売1,800円、当日2,000円/ 井上 Tel.&Fax 042-574-0886(Tel.19:00以降)

バイオグラフィーワーク・ファウンデーションコース

教育や医療、福祉から経済活動まで、地域社会の様々な場で、バイオグラフィーワークを伝えてゆくことを希望する人たちのためのコースをスタートします。(定員12名)

コース内容

1年目: バイオグラフィーワークの基礎

2年目: バイオグラフィーワークの実践

コース日程(初年度)

1. 2001年12月26日~29日
2. 2002年3月25日~28日
3. 同年5月中旬に個人セッションを予定
4. 同年8月13日~16日

対象

自分自身のバイオグラフィーに学ぶ姿勢のある方 / 社会、教育あるいは医療の諸分野の有資格者または同等の経験のある方 / 27歳以上の方

コース費用

受講料 年間185,000円 / 宿泊費 1泊(3食付)3,500円

会場 / 申し込み・問い合わせ先

Seasoning(シーズにんぐ)

栃木県矢板市長井2898-2 旧<sup>たかはら</sup>高原小中学校

Tel.0287-43-3950 / Fax 0287-44-1466

参加希望者はご自身の簡単なバイオグラフィーを下記へ送付のこと

コースリーダー

近見富美子 Tel.&Fax +44-1442-253125(U.K.) / fumikochikami@hotmail.com



薔薇十字ネックレスをつくりました

近藤幸子

羊の会~越谷シュタイナーを学ぶ会~

「薔薇十字ネックレスは、日本では見かけませんね」という西川先生の一言が、このネックレスをつくるきっかけとなりました。

埼玉県越谷で活動している「羊の会」、越谷シュタイナーを学ぶ会の月1回の西川隆範先生による読書会のときに、メンバーの方がRシュタイナーがデザインした貴金属の本をもってきてくださいました。メンバーの皆さんでその本を見ているときに出た話です。

たまたま私の主人が貴金属を扱う仕事をしていたことから、話は進んでいきました。西川先生が、ネックレスの付録としてRシュタイナーの「薔薇十字瞑想詩集(日本では未訳となっているものです)を付けましょうと言ってくださり、本当に小さな小さな詩集ですが、薔薇十字ネックレスと薔薇十字瞑想詩集でひとつの作品として出来上がりました。

今回、読書会に参加して下さっている方々との時間のなかでこのような企画が生まれたことを、メンバーの皆さまに感謝いたしますとともに、私自身関わることができて嬉しく思います。7つの薔薇の花びらのなかに輝くルビーにこめられた想いを胸に抱きつつ、たくさんの方々にこの薔薇十字ネックレスをつけていただくことは、作ることに関わった私たちにとって幸いに思います。

羊の会連絡先:

近藤幸子 Tel.&Fax 048-966-5922

今回33本限定。2002年4月までの注文には西川隆範訳『薔薇十字瞑想詩集』をお付けします。



47,000円 / チェーンなし  
39,000円 / 送料600円

デザイン: 西川隆範

クロス部分はK18ホワイトゴールド。花びらはK18で、花芯の上に煌めく7つのルビー(計0.2カラット) 2.7×1.7cm。チェーンはK18、K18ホワイトゴールド、トルマリン(黒3mm玉)の3種をご用意(各50cm) ご希望によって55cm、60cmのチェーン(各2,000円増)もごさいます。

お申込・問い合わせ: フォンテ  
Tel.&Fax 03-5688-0616  
E-mail eterna@d9.dion.ne.jp



読者の広場  
リーダーズ・フォーラム  
お手紙・Eメール・アンケートより

このコーナーでは、アンケートの回答を中心に、さまざまなご意見をご紹介します。



エルゼ・クリンク・アンサンブル公演  
をご覧になって、いかがでしたか？

すばらしかった。すべてよかったが、さ  
いこの群舞で集団の美しいまとまり、流れ  
にくっときました。重さ、軽さ、色、すべ  
て味わいつくした感じです。

(南沢シュタイナーこども園元父母)  
期待していた以上でした。初めてエル  
ゼ・クリンク・アンサンブルのオイリュト  
ミーを見ましたが、音楽を目で体験できる  
ということがこんなにも幸福なこととい  
うことを知りました。音楽と色と光とそし  
て身体表現が見事に調和していて、今まで  
体験したことのない喜びを感じました。繊  
細で優しさに満ちていて、しかも力強い。

オイリュトミーを習ったこともあり、見  
に行く機会も何回かありましたが、今日、  
はじめてオイリュトミーという芸術体験を  
したと思います。今後もこのような体験が  
できれば幸いです。

作品解説があつてよかったです。よりよ  
くわかりました。

今回でオイリュトミーを見るのは4回目  
です。前の3回は2年前にアメリカで、あま  
り環境がよくなかったのと、見るのも聞く  
のも初めてだったので、夢中で見ていま  
した。今回は大きな会場で音響もよく、冷静  
に楽しむことができました。予習をしっか  
りしていたので、細かいところまで見るこ  
とができました。さすが、シュトゥットガ  
ルトの選抜メンバーなので、動きが軽く、  
やわらかく、素晴らしかったと思います。  
意外と基本的に忠実に振り付けされているな  
と感じました。スピーチも迫力があり、マ  
ザー・グースでは少しコミカルに演じわけて  
いて良かったです。衣装も演劇を見ている  
ようで、内容にあわせて変えているところ  
が素敵でした。2時間があつという間に過  
ぎてしまいました。本当によかったです。  
スタッフの皆様、大変だったろうと思いま  
すが、また近いうちに来日公演か実現でき  
ると嬉しいです。(会社員)

初めて見ましたが、独特の世界で、言葉では  
うまく言い表わせない!という感じです。勉強  
して、また見てみたいと思いました。

のんびりできました。初めてみました  
が、よくは分からなかった。(エンジニア)

コーさんのヴァイオリンをもう一度聞き  
たくてうかがいました。オイリュトミー、  
全部がすばらしく、すっかりファンになり  
ました。時間があればまた伺いたいです。

2本の塔が悲しかったですが、人が人と  
してあるためにどうあらねばならないか、  
そんな願いと希望も感じさせる舞台上、元  
気が出ました。ありがとうございました。

最初は高尚すぎるなあと思ったが、だん  
だん引き込まれていった。一番良かったの  
は「展覧会の絵」。全体の動きが音楽とコド  
ウしあっていて、すばらしかった。

こんなにすばらしい形でオイリュトミー  
が行われたのは初めての体験です。特に「色  
彩」というオイリュトミーの文法を初めて学  
んだ、という感じです。(公務員)

オイリュトミーは今まで、動きの限られ  
た不自由なものだと思っていました。でも  
そうじゃない。いくらでも表現の可能性を  
もつものだと感じました。ありがとう。私  
も踊りたい。(大学生)

「ニュースレター」の読者の皆さん、  
こんにちは。12月初旬、またまた、今  
度はパレスチナで連続自爆テロが発生  
しました。アメリカの場合と違い、こ  
ちらはすぐにイスラム原理主義者のハ  
マスが犯行声明を出しました。1993年  
9月13日にアラファト議長とラビン首相  
の間でパレスチナ暫定自治の合意が出  
来たパレスチナ・アラブ人とユダヤで  
すが、今や、もろくも崩れそうです。  
それにしても、何度も繰り返されるテ  
ロ、私たちはどのように考えたらいい  
のでしょうか。10月29日に国会で「テロ  
特別措置法」が可決されましたが、私  
たちも彼の地の出来事に無関心を決め  
込むことは出来なくなりました。

歴史の幾つかの点に注目してみま  
しょう。まず、空爆後のビン・ラディ  
ン氏の声明に「イギリス・アメリカに対  
する80年にわたるアラブの屈辱」とい  
う言葉がありました。これは20世紀の初頭  
に行われたイギリス、アメリカによるア  
ラブ諸国の国境線策定のことでしょう。  
石油の利権が絡んでいるため、西洋諸  
国は自国の国益に沿ってアラブ諸国の国  
境線の線引きをしました。

次に、前号で西川隆範氏が指摘してい



第7回「イスラム原理主義者による「自爆テロ」

植田信

Makoto Ueda

植田信さんは執筆家として、「月曜評  
論」などに社会評論を連載中です。昨年  
連載した『ワシントン・コンセンサス』  
は『ワシントンの陰謀』と改題し、いよ  
いよ書店に並ぶ予定です。

uedam@mb.infoweb.ne.jp

ましたが、旧約聖書の創世記にあるア  
ブラハム、ハガル、イシュマエルの問題が  
あります。アラブの血統とユダヤの血統  
の対立です。「コーラン」が最初のほうで  
この問題に注目していますが、それだけ  
根が深い問題です。

シュタイナーは、その「コーラン」が誕  
生した時期(7世紀)、アラブ人はアーリ  
マンとルシファーの影響を受けていたと  
指摘します。マホメットの見た「天国」が  
ルシファーの国だったことは前号で見ま  
したが、さらに、この時代以後に隆盛を  
極めたイスラムの学問が、実はゴルゴタ  
の秘儀の意味を隠匿するものだった、と  
シュタイナーは述べました(チューリッ  
ヒでの講演1918.10.16)。これが本当な  
ら、恐ろしいことです。

そして近代の問題です。世俗と聖を区  
別したのは西洋近代ですが、イスラムは  
これにどう対応するのか。私が思うに  
は、テロの本質にあるのはこの問題で  
す。俗に言う「政教分離」問題です。ア  
メリカはタリバン(12月7日、最後の拠点カ  
ンダハルから撤退)、ビン・ラディンを  
武力でねじ伏せるでしょうが、一方、パ  
レスチナ問題は単に「武力」だけでは解決  
しないでしょう。超難問です。



フォーラム・スリーニューズレター  
オープンフォーラム

編集発行 フォーラム・スリー

〒162-0044新宿区喜久井町20 森川ビル1F

Tel.03-5287-4770 Fax 03-5287-4771

E-mail info@forum3.com

URL http://www.forum3.com/

年間購読料3,000円(年10回発行)

郵便振替00160-9-606986フォーラム・スリー



次号に向けて

昨年の12月にフォーラム・スリーを始めから1年が過ぎました。ほんとうに、あっという間の1年でした。農業講座をはじめとした、たくさんの講座やワークショップがありました。多くの方からご声援をいただき、数知れない出会いがありました。

ニューズレター“オープンフォーラム”が創刊すると、いままで知らなかったところからさまざまなニュースやエピソードが飛び込んでくるようになり、このような開かれた場がどんなに求められていたか、あらためて実感しました。そして美しくも楽しい思い出となった清里合宿もありました。40人もの方々と寝食をともにし、たっぴりと芸術を楽しみ、思い切り談笑できたことは、わたしたちにとってもかけがえのない思い出となりました。

オープンフォーラム早稲田のお披露目もありました。運営に協力して下さっている皆さんからは、このスペースを使った活動のアイデアが次々に上がってきています。フォーラム・スリーの多彩な活動を支える

スペースとして、これからどんな発展をしていくかとても楽しみです。そして、いまも心に余韻が響いているエルゼ・クリンク・アンサンプル日本ツアー。思いもよらず、今年も大きな仕事を担当させていただけたことを嬉しく思っています。これだけ多くの方々から、これだけ得難いものをいただけるこの仕事を始められたことに感謝しています。

特集記事はいかがでしたでしょうか。わたし自身、若い頃は“老いる”ということを考えてみてもしませんでしたけれど、それが我が身となってみると、いまさらながらに事の重みをひひしと受け取っています。わたし自身が身を託したいと思えるような場、お年寄り、若い世代、そして子どもたち、障害をもつ人にとっても暮らしやすい場をつくっていききたいですね。記事へのご感想など、お聞かせ下さると嬉しいです。(しまだれいこ)

今回の特集記事は、モモの多大なるご協力によって送り出すことができました。大久保真由美さん、ほんとうにお世話さまでした。次号は“お話”特集の予定です。(佐藤雅史)



特別養護老人ホーム“モモ”でのコンサート風景  
左のカメはモモのマスコット“カシオペア”

フォーラム近況

“エルゼ”東京公演終了後、福岡に飛び、福岡公演でレーパーさん一行を見送る。福岡を中心に活動されているオイリュトミステイン田原眞樹子さんともお会いでき、活動をまとめいく力、そのご活躍ぶりに目を見張る。各地の皆さん、ご苦労様でした。

“New War”の行方を横目でにらみつつも、公演の余波でニューズレターNo.7は1月遅れの発行に。No.8を11月12日合併号として、1月以降はコンスタントに発行していく予定。

ライアーへの問い合わせはだいぶ落ち着いてきたものの、泉本信子さんのミニ・コンサートにはたくさんのご来場をいただく。これからも引き続き開催の予定。

11月末、アリア・パワードワジさんが日本入り。各地のワークショップはたいへん好評で、鹿児島では平和市民運動のグループを中心に50名もの方が集まったとのこと。フォーラムでの講座が楽しみ。

ニューズレター講読のおさそい

オープンフォーラムは気に入っていただけでしょうか？ これからさらにブラッシュアップしたニューズレターをお届けしたいと、一同はりきっています。

いただいたアンケートは、ニューズレターばかりでなく、ワークショップなど様々な催しへの貴重なご提言として、フォーラム・スリーの活動のなかに反映させていきたいと考えています。

これからもオープンフォーラムをどうぞよろしくお願いいたします。

オープンフォーラム年間購読料 3,000円  
お手数ですが郵便振替でご送金ください

アントロポゾフィー  
人智学のためのフリースペース

オープンフォーラム早稲田誕生



オープンフォーラム早稲田は、アントロポゾフィーをベースにした様々な講座、ワークショップ、講演などのためのスペースです。フォーラム・スリーがアレンジする魅力的な講座のほか、皆さまにも自由にご利用いただけます。

オープンフォーラム早稲田

地下鉄東西線早稲田駅より徒歩5分

地下鉄大江戸線若松河田駅より徒歩7分

広さ16坪 / 収容人数最大50人程度 片側全面ガラス窓 床じゅうたん敷 黒板 机・イス 平日9:30~12:30 3,000円, 13:30~17:30 4,000円, 18:30~21:30 4,500円 土日祭9:30~12:30 4,500円, 13:30~17:30 6,000円, 18:30~21:30 6,000円 個人使用1時間単位で応じます。

